

日本記者クラブ会報

創立15周年記念パーティー

11月1日 各界要人も招いて

われわれのクラブもいよいよ、十一月一日に十五歳の誕生日を迎えることになった。光陰まさに矢のごとしと思う会員諸兄も多いことだろうが、とにもかくにもクラブは予想外の成長をなしとげた。次は成年を迎え、世界第一流のナショナル・プレスクラブに発展することだ。

いまはまだ二十歳とか三十歳ではないので、それほど派手なお祝いはいらないが、地味ではあっても思い出に残るなにかをしよう、というのが理事会、各委員会の総意であった。まず、この日午後零時半からの創立十五周年記念パーティー。政府首脳、各政党首脳、財界首脳のほか各省庁のニュースソースたち、各国の

大使、外国報道関係者などをお招きして、出席メンバーと存分に歓談してもらおう。参加は申し込み方式で、会費無料。

「ゲストサイン集」

次は会報委員会(深谷憲一委員長)苦心の記念刊行物。お待ちかねの「ゲストサイン集」(A5・270ページ)もまもなく完成する。

「ゲストの方には記念として氏名を記帳していただいておりますが、このサイン帳は十五年間で三十七冊、千名を超えるに至りました。多くの会員からは、実際のサインを見たいという要望も寄せられていますので、ここに当クラブ十五周年の記

第176号
1984年
10月10日発行

東京都千代田区幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二(代)

念事業として、歴史的にフットライトを浴びた各国首脳や異色のゲストなど二百二十人のサイン集を刊行しました。このように内外の多彩な顔振れのサイン集は稀有のことであり、サインの一つ一つを通してこれらの人物の登場する歴史の一コマ、一コマが想起され、乾坤日夜に浮かぶ感じがあります。永く会員諸氏の書架に蔵されんことを望みます」(新井明理事長序文)というわけである。

「とっておきの話」

お楽しみの「とっておきの話」(B6・280ページ)もできる。会員の職業上の思ひ出話などを集めたもので、「ある意味では日本ジャーナリズム秘史ともいえる、きわめて興味深い読み物」(新井明理事長序文)ということで、記念日前後には二冊そろえてお手許にお届けしたい。

「会員名簿」と「ルールブック」

締め切りを九月一日に変更して作業をしていた今年の「会員名簿」は、すでにお手許へ発送した。

またクラブ利用に関する「ルールブック」の、八年ぶりの改訂版(B7・ポケットサイズ)も十月中旬にはお届けできるはずである。施設運営委員会(小林淳宏委員長)は、これからのクラブライフを快適にするためにも、会員諸兄の熟読と遵守を切望している。

それやこれやで事務局にとってはかなりきつい夏ではあったが、どうにか乗り切ることができた。秋風とともに晴れのペースデー・パーティーの準備が進んでいる。

十月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六二四人
個人会員	一、一八四人
法人・個人賛助会員	六五社
特別賛助会員	一九七人
名誉会員	七四人
計	二二二社、二、〇九五八人

とっておきの話

ロンドン特派員と

ドア教授のへつと



枝松茂之

私は一九五二年の春から二年近くロンドン特派員をやったが、その間、私の仕事を助けて、助手のような仕事をしてくれたのが、現在日本およびアジア経済、農村社会学の大先生になっているR・P・ドア(Dore)教授であった。なぜこういうことになったかといえば、その年日本が戦後初めて参加したヘルシンキのオリンピックのせいなのである。

この時、毎日新聞は、社会部の福岡豊君(故人)、写真部の安保久武君のほかに、運動部からかつてのベルリン大会平泳ぎの覇者、葉室哲夫、三段跳び大島鎌吉両君を特派した。それに世話役格でヨーロッパを移動していた今村得之君

(故人)が加わった。当時の外貨事情からすれば、新聞社としてこれが精一杯のところであった。

オリンピックの開会式は七月十九日であったが、報道陣の多くは七月初めからヘルシンキとストックホルムに集まった。日本選手団の練習ぶりを見るためであった。

私はロンドンで、"どうせ期間中は何を書いても載るまい"とのんきに考え、ロンドンの初夏を楽しんでいたところ、突然本社から「タイプライターに習熟した者を連れてヘルシンキに応援に行け」との訓電が来た。ストックホルムの今村君からも、同じような電話があった。国際電話やテレタイプなどが自由に使える現在と違う。

記事はすべてタイプに打って、電報局に持って行かねばならぬ。ゴールド・メダリストの記者とて、タイプは苦手ということが分かったのである。写真電送の手だてをどうするかも準備しなければならぬ。

ロンドンに居住する日本人で、ある程度自由な時間を持ち、タイプなどで新聞社の仕事を手伝うことができるのは、まず日本の在英留学生であろう。私はこう考えて、顔見知りになっていたロンドン大学の日本人留学生に声をかけた。旅費、宿泊費、多少の手当てなど全部新聞社持ちで北欧旅行ができるのだから、この留学生君すぐOKした。

ところが数日後、がっかりしたような顔をして私の宿舎(三流ホテル)にやって来た。「実は、自分は英国政府(British Councilのこと)から学費をもらって留学しているの、英国から出てはいけ

ない規則があったのです。残念ながらやめるより仕方がありません」という次第。こちらはアテにしていたし、期日は迫っているし、困ったが、「それでは私の方の先生はどうでしょうか。もちろん英人だけど、日本語は読み書きもほとんど完全にできる人です。大学も休暇に入るし、きつと行ってくれますよ」という。達筆?の新開原稿を英人が果たしてローマ字タイプにしてくれるかいささか不安だったが、とにかく頼むことにした。

二日ばかりして留学生氏が、「先生」を連れてホテルに来た。ロンドン大学日本語学科の講師(Lecturer)になったばかりのロバート・フィリップ・ドア君であった。当時二十七、八歳であったろうか。茶色の上衣にグレイのズボン、黒い頭髪を無難作に額に垂らしたとび色の眼をもった明るい感じの青年であった。日本語は海軍の語学将校としてみっちり仕込まれ、戦後はしばらく東大にも留学した経験があり、日本の新聞な



講演のため1960年1月に来日したドーア教授

ども自由に読みこなす。まずは完べきの日本語であった。

英国の大学教員の組織はアメリカや日本と違って、大学によっても違うしなかなか複雑だが、よく大ざっぱにいうと、教授 (Professor) の次に (必ずしも下ではない) リーダー (指導者ではなく、Reader、講義専門で雑用は一切やらない、地位は高い) があり、その下に講師 (Lecturer)、準講師 (Assistant Lecturer) または Research Fellow (助手という感じ) がある。

ドーア君は若くして講師になっていたのだから、相当の秀才であった。だからこそ、その数年後にはカナダのB・Cコロロンビア大学の

教授、ついでリース大学を経てロンドン大学のリーダーから教授、サセックス大学の教授を歴任した。一九七五年にはFellow of the British Academy (英国学士院特別会員) になっているが、これは学者としては非常に高い地位である。日本語に翻訳された著書もいくつもある。現在はサセックス大学の経済開発研究所長であり、英国の社会学者、特に日本問題研究者としては第一級の評価を受けている。

私もあまり詳しく知らないくらいだったから、ヘルシンキの特派員諸君が、この将来の大学者にそれなりの尊敬をはらっていたわけではない。新聞記者一流の読みがたい字で次々に原稿を書いている「頼むヨ」と、ドーア君のタイプに回すのであった。できあがった写真に適當なキャプションをつけて (もちろんローマ字日本語で) 電報局にタクシーで走るのもドーア君の役目であった。

私はスポーツ専門でないの、あまり重要でない (当時の話)、たとえば重量挙げなどの取材に当たったが、同じ記者席にいた共同の坂田二郎君が、タイプを使わずブロック文字でタイプ用紙を埋めていたことを思い出す。驚くべき速さであった。

さて、八月三日、まずまずの成績でオリンピックが終わると、私はドーア君と一緒にドイツを経由して、十日ほど後にロンドンに帰った。これで毎日新聞に協力するドーア君の仕事はすんだわけだが、私は頼んで、アシスタントのような形で仕事を助けてもらうことにした。エコノミスト、ニューステーツマン、スタティスト、リスナー、その他の雑誌を読んで、面白そうなどころにアンダーラインをしてみたら、次にこれは重要なこととだが、手紙を書いてもらうこと、インタビュアーのアレンジをしてもらうことなどであった。手紙に使う敬語には、全く閉口する。チャーチル内閣で三度目の外相に就任していたイーデンにインタビュアーを求める手紙の最初に "Dear Sir" と書いたら、真っ先に赤字

で "My Lord" と直された。イーデンは、この時すでに Earl of Avon であった。

九月になるとイングランドの中部の保養地バクストンで、国際綿業会談というのが開かれ、日米欧の紡績会社の首脳が全部顔をそろえた。ランカシャーを追いつめる日本の綿業を抑えようとする会議であった。今や中進国から追いつめられる日本、時の流れは面白いものである。

私は毎日会議の成り行きを電報したが、バクストンの郵便局 (電報局) は午後八時には表戸をおろして、後は一切受けつけない。国際会議などお構いなしである。そこで考えたのはドーア君のこと。毎晩電話で彼の宿に原稿を送り、ローマ字で打電してもらった。座談会の原稿まで、この手で電話送稿した。送った原稿の原文は、ついに見なかったが、本社からは感謝電がきた。

えだまつ しげゆき氏略歴 明治四十四年岡山県出身。七三歳。東京大学文学部卒。昭和九年毎日新聞入社。ロンドン、ワシントン特派員、外信部長、編集局長などを経て、常務取締役東京代表、専務取締役編集主幹を務める。五十二年退社。現在アジア調査会常務理事、毎日コミュニケーションズ取締役。

動き出した臨教審

ワーキングプレス

「今からこれでは、この先が思いやられるねえ」——九月十四日開かれた臨時教育審議会の第二回会合を終えて部屋を出たある委員は、ため息まじりにこうつぶやいた。

この日は、事務局が示した議事規則の原案をめぐる論議だけで予定の二時間が費やされてしまい、教育改革の本論にはとうとう入れずじまいだったのである。

ハプニングの原因となった議事規則の原案は①審議会の定足数は会長を含む過半数とし②議事は出席委員の三分の二以上の賛成で決する、という審議会の内規としてはいくありふれた内容のもので、岡本会長と二人の会長代理には前日内諾を得ていただけに、事務局としてはすんなり承認されるものと信じて疑わなかったようだ。

ところがいざふたを開けてみると委員の間からは教育改革は国民の幅広い合意がなくては進められない問題であり、本来「多数決にはなじまないのではないか」「で

得いくまで審議を尽くすべきだ」と異論が続出したのである。

おまけにこの事務局案が前日までにマスコミを通じて報道されていたことが、火に油を注いだ形になった。文部官僚中心に構成されている事務局が、報道機関に意図的に情報を流したのではないかと誤解した一部の委員が、「審議会を意のままに操ろうとする姿勢は断じて許せない」と、原案の白紙

のっけからハプニング

影山 日出夫

撤回と事務局員の更迭を迫る緊迫した場面もあったと聞く。

結局この日は①定足数を三分の二に引き上げるとともに②議決の方法は「委員の合意による」とだけ規定し多数決は明記しないことで、何とか収拾された。

事務局にとってはまさに予期せざる出来事だったようだが、臨教審設置法案の国会審議をふり返って見れば、事務局側の読みの甘さ

を指摘されても仕方ないだろう。

首相直属の諮問機関を設置しようという中曽根首相の構想に対して、野党側は当初「教育の政治的中立が侵されるのではないか」と一様に警戒感を表明していた。それが公明、民社両党の賛成で発足にまでこぎつけられたのは、政府側が「各界各層の意見が反映される審議会にしたい」と、ひたすら「国民合意」による教育改革を強調してきたからである。

その意味で臨教審にとって国民合意というスローガンは単なるスローガンでは済まされない重みを帯びていたはずだ。

委員の中には官僚の作文を追認するだけという、従来の事務局主導型の審議会に飽き足らない思いをしていたメンバーも多かっただけに、わずか十数行の議事規則は、事務局が言うような「形式的な手続き」を越えた、象徴的な意味合いをはらむことになったのである。

首相官邸と文部省の対立の構図の中で見られてきたせいか、臨教

審のこの日のハプニングも文部省中心に構成されている事務局の思う通りにはさせない、という官邸筋の先制攻撃と見る向きもあるようだ。

しかし当の中曽根首相は、このところ教育改革の具体論に踏み込むのはできるだけ避けて、審議への介入と受け取られないよう気配りをみせている。

議事規則でこりた事務局側も「私達の仕事は弁当の手配だけ」と表向きは完全な黒衣に徹する構えだ。

こうした中で審議会は十月中旬に具体的な検討課題を絞り込み、早ければ十一月にはテーマ別の小委員会が走り出すことになる。従来の審議会とは一線を画した自由闊達な論議が身上だけに、臨教審の動きから当分は目をはなせないようだ。

(かげやま ひでお NHK政治部)

京都・大阪連続殺人事件

ワーキングプレス

長い事件記者生活で、これほど特異で不思議な事件に出会ったのは初めてである。

事件は九月四日の白昼。「至急、至急、こちら115号。助けてくれ……」の警察無線で始まった。

現場の京都市北区、船岡公園で、京都府警西陣署十二坊派出所勤務の巡査が殺害され、短銃が奪われていた。その短銃は、三時間後、大阪市都島区のサラ金店で使われ、従業員が射殺され、現金が強奪された。警察庁は京都・大阪の連続殺人を広域重要事件115号に指定。翌五日、

容疑者と浮かび上がった元西陣署巡査部長広田雅晴(四一)が、千葉県成東町の実家に立ち寄りうとして逮捕された。

広田は強盗殺人容疑で送検されたが、京都地裁は、代用監獄である警察留置場での拘置を認めず、京都拘置所に移された。以後、厳しい追及にもかかわらず、広田は動機はもとより犯行を全面否認。奪われた短銃も発見されていない(九月二十五日現在)。

事件発生から容疑者の逮捕まで

わずか二日間だったため、取材の焦点は、短銃発見につながる広田の足取りと、異常な犯行の動機の解明に向けられた。

広田には過去がある。六年前、勤務していた西陣署から短銃を盗み出し、郵便局強盗をはたらいた。加古川刑務所に服役。仮出所して五日目に、今回の事件である。

事件の背景、動機については、本当のところはわからない。前回

取材、報道姿勢に問題も

清原邦雄

の事件では、上司への不満や本意な配置転換が理由とされている。これはあくまで本人の供述で、周囲の話を総合すると、配転は自ら望んだことだし、上司への不満といっても勤務態度を幾度か注意されたことぐらいという。にもかかわらず、今回の事件の背景が、前回の事件に秘められているようだ。現に、服役中、同房者に「京都府警への復しゅう」を語っ

ている。

この「復しゅう」動機説は、広田がつくり上げた自己流の理屈であるような気がしてならない。仮出所直前まで、専門書を取り寄せて農作業に関する三つの資格を得。面会の母親に「故郷で農業をやる」と話している。出所間もない犯行。その理屈づけは「復しゅう」かもしれないが、直接的な引き金はもっと別のものではなかったろうか。家族関係など、衝動に走らせた何かが。

衝撃的な事件だけに、新聞、テレビの取材はエスカレートし、取材報道の方法、姿勢に問題点も残した。記者会見で捜査幹部が話した例え話が、翌日の朝刊には、そのまま広田の犯行事実として活字になったこともある。何の根拠もなしに「広田が西陣署幹部宅をねらう」という人権を無視した「お話」を書く記者もあった。

なかでも驚かされたのは、某紙が「犯行の前日に広田が西陣署へ決行を予告」と報道したことである。それを追って別の社が「広田

は銀行強盗も計画」と書く。いずれも記者会見で、デタラメであると看破された。その社の記者はこう弁解した。「デスクから」おまへは推測記事も書けんのか」とどやされてネ。

事件が燃えているときには、何を書いてもいい。少々は飛ばしてもかまわん——こんな考えがまかり通るようになれば、私たち新聞人は、自らの生命を自ら断つことになる。今回の事件に限らず、グ

リコ事件をはじめ様々な特異な事件が相次ぐ。それにつれ、報道がセンセーショナルになりがちである。事実は何か、をじっくり見極める冷静な目が、いまこそ、求められているようだ。

(さくらにお 京都新聞社社会部)



西陣署に護送される広田雅晴

全大統領初訪日

ワーキングプレス

九月六日午後二時、厳戒態勢の羽田空港に、全斗煥大統領は降り立った。

全大統領と一緒に特別機で来日したわが国の報道陣は、総勢十三社五十人強。その内「青瓦台」担当記者（日本でいえば官邸担当）が約二十名。スチール写真は、連合通信がブル取材に当たった。テレビは韓国放送公社、韓国文化放送が、それぞれ取材陣を送り込み、大統領滞日中何回も生中継を行うなど、連日精力的に映像を送った。

私も東亜日報東京支局は、プレスセンタービルの八階にある。普段は私と鄭求宗特派員の二人だが、八月末には本社から李相河編集委員が助っ人として来日した。

この頃は、もっぱら大統領訪日に関連した新聞、テレビ、ラジオ報道をたねんに翻訳、整理し本社へ送る作業に追われた。ところが、途中で鄭特派員が過労でダウン、入院という事態に陥ってしまった。が、昨年慶応大学新聞研究所へ留学した経験を持つ、ベテラ

ン李さんが見事に代役をこなしてくれた。

大統領に同行してきた崔圭徹政治部記者は、ホテル・ニューオータニにカン詰めのままだった。どこの国でも同行取材は同じだろうが、彼は、とうとうホテルから一歩も外に出ることがなかった。私とのやりとりももっぱら電話。七日夜、私はホテルへ崔さんを訪ねた。ちゃんとプレスカードを持っ

新時代の真価はこれから

韓 甲 洙

ている私も、なかなかホテルの中へ入れてもらえない。警備のすごさには恐れ入った。やつのことでも中に入ると、崔さんは「昨夜は一睡もしていない。今晚も、眠れないなあ」と話していた。崔さんはラングーン事件の際も大統領と同行していて、大ケガを負い今も後遺症に悩んでいる。

八日、たまたま乗ったタクシーの運転手に取材してみた時、彼は

次のようなことを言った。

「警備がレーガンの時よりひどくて、商売にならない。それに全大統領の顔がよくない。でもきのう（七日）の記者会見をテレビで見えて見直したね。はつきりものを言うけど、紳士的だな。きのうの表情はよかったよ」

私は、全大統領が言った「全市民に対して私の訪日のために迷惑をおかけして申しわけない」のひと言を思い出し、つくづく

く良かったと思った。政治レベルでの韓日関係は確かに一歩ずつ進んでいるといえる。しかし、国民同士の「感情」の間に

は、まだまだ距離がある。韓国民の中には、現在の日本におけるシンボルとしての「天皇」の立場を正しく理解していない人も多い。「近くて近い国」になるためには、国民間での理解、友情が深まっていかなくてはいけないと思う。そこで私たちは、現在の天皇と日本政府の関係を解説する記事も掲載し、今回の来日を機に理

解が深まればと考えたが、道のりは決して平坦ではない。

天皇のお言葉に「反省」のひと言がなかったことに、不満を抱く韓国民も多い。「遺憾」と「反省」とでは、語感がずいぶん違う。大統領訪日前の八月、外務省が韓国の政治部長クラス十七名を招待した時、中曽根首相は「被害を反省する」と述べた。翌日ソウルの各紙が、一面トップでこれを扱った。天皇の「お言葉」と総理発言の間に何か計算された政治的な臭いを感じるの、私だけではな

いようだ。教科書問題、加害者・被害者の意識の違い、日本側がよく口にする「三十六年を水に流す」ことへの疑問など、問題は多くはない。「韓日新時代」の真価はこれからだ。

（ペン カブス 東亜日報東京支局長）



全大統領訪日を伝える連日の大見出し

森繁久彌さんを

囲む会から(Ⅱ)



ほんとに文化のないのが日本の国会で、皆さま方はいつもおいでになっているんですが、あれは非文化的の殿堂だと思っております。

何か事あらばけんかしやうというので、手ぐすね引いて待っているんですね。言葉尻をとらえていちゃもんをつける。野党が正しいのか与党が正しいのか、そのへんは皆さんのほうが専門でございますので、ご諒察下さって結構でございますが、あんな非文化的なものはないと思います。

よく縞の背広の親分衆みたいな人が出てきまして(笑)、声もわりにガラが悪いんですね。夜店で何か売ってたんじゃないか、というような声を出して、「わたしがいきているのは、それじゃないだろ、きみイ。イエスカノーかときいとるんだ。イエスカノーか。それを総理、あんた、イエスカノーかを言ってくれよ。簡単なことじゃないか、きみイ。イエスカ、ノーか！」

このあいだに、ちょっと中間的なものが入ります。

「ソォーリダイジン、何とかクゥーン」

これがちょっと間が抜けております。(笑)

こんど、総理が出てきまして、これがまた、いまの中曽根さんはなかなか能弁ですけども、能弁でない方が、

「ウー、ウウウー……、ま、いままでエー……アア……」なんて、まだるっこいような答えをするので、またその縞の背広衆が怒って、

「何を言ってるんだよ、あんたア、さっきから。イエスカノーかかってきているんだ。イエスカノーかイエスカノーか、きみイ、男らしくない!!」パカにしてエ……」

というようなことになります。

ところが、向こうのウォーターゲート事件なぞみますと、両方ともニコニコ笑っているんですね。被告も……被告というんでしょうか(笑)。あれは驚きでしたですね。ニコニコニコニコ笑いながら、楽しそうな顔をしながら、「オー……」なんて手なんか挙げたりしている。

そのくらいのこと、日本でもやったらどうかと思うんですがね。あれはどういうわけですか。まず代議士になるには柔剣道は段持ちでなきゃならないというような話があるそうですが、それは段持ちでなければ、あれだけの大ぜいの人間が攻めてきた時に(議長席を守って)、「このオーッ、待てエッ。さア、終了だと言っ下さい」なんてなことを言うのはとてもじゃないけど、ダメでしょう。

だんだん話がとぶようでございますけども(笑)、えー、きょうは座談でございますので、お許し願いたい。

息が合わなきゃダメです

剣と剣を抜きまして(正眼に構えて)、真剣試合でございます。「抜けば玉散る氷の刃」といいますが、真剣勝負で両方が向かい合った時に、「どこ見て打ち込むんだ」という話をしたことがございます。

「どこ見てって、向こうの剣の先をジューッとにらんで……」

「それは違いますね」

「あ、違いますか」

「どこを見て打ち込みますか、あなた」

「目ですか。相手の目でしょう。まばたきをしたなと思ったら、トーンといく」

「それは近いんですけども、違いますね」

結局、どこだときいたら、呼吸、息だということですね。つまり、人間が吐いている息というのは、非常に強い息だそうなんです。だから、笑うのは健康だというのは、あれは全部吐く息だからでございます。「アッハッハッハッ」。決して吸えませんが(笑)泣く息というのは全部吸うんですね。(左手の甲を口元にもっていき)「あなたに、ウッ、お茶碗なんか、ウッ、ウッ、ぶつけるつもりはなかったんだけど、ウッ、ウッ、ウッ……」なんて吸う息でございます。吸う息は弱い。吐く息は強い。猫なんか、飯を食ってる時に手をもっていきますと、フウッといふ吐きまします。

これは動物的にそうで、息を吐くんです。ですから息をスウーッと吐いて、終わった瞬間に打ち込むというのが剣の道だそうでございます。

これを「呼吸」と言いますが、アメリカのセー

ルスマンの手引きを読みますと、一番最初に「相手と呼吸を合わせなさい」と書いてある。売りたい相手と呼吸を合わせなさい、そうしないと買いませんよ、と書いてある。なかなかいいことですね。

「アノォー、マダム、これは山形でとれたサクランボでございますが、（サクランボの盛られたサンデーグラスを手にして）、普通、町では売っておりませんので、きょうお持ちしたんですが、いかがでございますでしょうか」

「そうですね。フウ（軽く息を吐く）、山形なの」

「ええ（息を吐く）、山形でございます」

相手とおなじように呼吸を合わせていると、

「ちょっと拝見しようかしら」

「そうでございますか、どうぞ見ていただいて」

というようになつて買っていただけ。

「（せき込んで）あ、これ、山形でネ、え、とれましてんです。アノオ、ともかくですね。これはもう、外国にない、外国のやつは紫色ですけど」

「あたし、ちょっと忙しいの。すみません」

これでは買ってくれない。自分が売りたい時には、相手に呼吸を合わせる。呼吸が合っていないということとは、相手と同調していないということです。

一番よくそれを利用しているのが国会でございます。相手とは呼吸を合わせない。かたや「イエスカノーか!!」と言っている時に、「アーアアアア、ウウ……、長い、このォー、オーオーオー、オー、日本のオ、オー……」。そんなこときいてないんですけど、どうでもいいようなことを言う。相手と呼吸を合わすとケンカになりますので……。

ともかく呼吸を合わすということは、同調するとい

うことでして、そうすれば買いたくないものも買ってくれるということになります。

わたしどもの芝居でも、息が合うということが、要諦になっております。

泣かすのは易く笑わすのは難し

文化の話をしようと思っておりましたが、いろんなところへ話がとんでしまうので、これをまとめるのに非常に苦労しております。何と言いますか、ジョークとか、エスプリのない国民は、非常に貧しい国民だ、文化的に幾らかクラスの低い国民だといわれますが、あのロシアでさえジョークがあるんですね。でも、わたしはあまり信用しませんが、日本人は笑いながら事をするを非常に不真面目なようにとお

りまして、

「この人は、森繁さんで、喜劇役者ですが……」

「あ、そう。そこへでも座つてくれ」

と、わりあい突っけんどんに扱われる。喜劇役者だと言ったばかりに。喜劇ということ、非常にバカにするんですね。人を笑わすということほど難しいこととはございません。人を泣かすことはやさしいですよ。もうそんなことはご経験があたりでしょうから、あまり言いませんけれども。（笑）いや、ほんとに。泣かすことは簡単でございますが、笑わすということは非常に難しいんです。やはり国会などのやりとりにも少しジョークを入れたらどうでございますでしょうか。

「真面目にやりましたまゑ、真面目にイ。きみイノ」

なんて言うんですが、真面目にやっているからジョークを言うんであって、ジョークを言ったから不真面目

目だということはないと思うんですが、まあ、そういうことが往々にございます。

アルメニア人のお菓子屋さん

満州で終戦になりました……。わたしの子供がベツと家の中に入ってきて、

「パパ、キカンジウ……」って言うから、

「機関銃がどうしたの？」

「キカンジウ……」

そのうちにバツとドアを開けて、土足のままで五人のソビエト兵が入ってまいりまして、マンドリンといひます自動小銃をわたしに突きつけました。やおら窓から中尉が入ってきました、ドォーンとテーブルの上に座つて、

「モシゲン、モシゲン」（森繁、森繁）

と、ドンドン、ドンドンとすごい力でやるんです。

わたしは顔面が蒼白でございます。アルメニア人のお菓子屋さんが近所でございます。わたしどもがしじゅう買ひに行っていたいいお菓子屋さんでございます。そのおじさんが横に座っているんですね。

「おじさん、どうしたんですか」

「いや、わたしは通訳ですよ。いまでこそバラしますけど、わたしはスパイだった。伊勢神宮へも行ったし、どこそこへも行った」

「はア、あんたスパイだったんですか!」

びっくりしました。

「いま、中尉はあなたにこう言っている。どこの家に警察の誰が隠れているとか、憲兵や市長や知事がどこにいるか知ってるだろう。知ってれば五人出せ。そ

したらおまえを満州からシベリアへ行かなくてすむようにしてやると」

何かすると、バラバラッと撃とうと思って四人がこっちに銃を向けている。わたしは蒼白になりまして、そういう時には弱いんです。ここで犬死をするのかな、厭だなど思いながら、子供もいるのに、母親も連れて行っておりましたから、これは何としたことだろうと思つてますと、女房が悠々と紅茶をいれて入ってきました。この時に、女房をチラッと見て、その時につくづく思いました。これは一筋縄ではいかんわ、この女は偉い女だな、と思いました。悠々と紅茶を置いて、

「アルメニアのおじさん、通訳して。あたしはソビエトが大好きでした。そう言つてちょうだい」

アルメニアのおじさんが通訳している。
「そんなにあたしが尊敬している国の人が、こんな不作法な格好で入ってくるのには、本当にびっくりしている。そう言つて下さい」

と、悠々とやるんですね。

そのうちに中尉は、椅子に座り直して、女房の話でだんだん行儀がよくなってきました。わたしはまっ青でガクガク、ガクガク震えていましたが、

「じゃ、奥さん、五人捜して、わたしにひそかに通告しなさい。きょうはこれで帰るから」

と言つて帰りました。爾来、わたしは、あの女房にずーっと頭が上がりなくなつた。本当は、ついこのあいだも離婚したいと思つて、離婚のことを一生懸命考えましたんですけれども、あのときのこともありますんで、やはり、ダメになりましたが。

妻と水杯をしてナイフを渡す

それから一週間経つた水曜日。誰も捜せなかつたら冬の用意をして、同潤会の六階建ての建物に來い、と言われていました。そこはわたしどもが勤めておりました電信電話放送の株式会社、つまり昔の通信局、その独身寮です。そこが司令部になっている。わたしは、とても誰がどこに隠れているか、そんなこと言えるわけがないので、前の晩に水杯をしまして、ナイフを渡して、おれはどこに行くか知らんが、必ず逃げて来るから、おまえは南新京を通つた時には、必ずあそここのあの柱のところに、通つた印に杏子のKの字を書いておいてくれ、という約束をして、水曜日の朝、司令部へ行きましたら、中尉が出ておりました。

「わたしは、おまえを待つていた。多分名は出ないだろうと思つていた。監獄が用意してあるから來い」と言われ、わたしは監獄ヘドボーンと入れられた。

地下二階の「ニーヤ」といいますが、満人が寝泊まりして暖房の火をたく部屋なんです。そこに鉄格子がありまして、二重鍵が付いていて、そこに放り込まれました。

もう、びっくりしました。血だらけの、目のちよつとつぶれたようなロシア人が、いま日本人をぶつ殺してきたという奴ばっかりが、いっぱい入つて来る。隅っこで小さくなつていたら、

「オイッ」

というから、

「ヤ、ヤ……ダ」

なんて言つて、ハルピンの女郎屋で覚えたロシア語

が出てこないんです。女郎屋でしかロシア語覚えなかつたものですから。(笑)煙草ないか、と手まねできくから、

「ニエツト」

するとオレは持つてると言つて、煙草を出して火をつけて、「おまえ喫え」と出します。血がついてるんですよ。二、三服喫つて、

「オーチン、ハラジョー」

その次の晩に引つ張り出されまして、両手を縛つて背中を全部出されまして、ローソクをつけて、わたしの背中を焼くんです。これの熱いのつて、たまつたものじゃないですよ。やられた人でなきや、とても説明できません。背中をギリギリ、ギリギリ焼いて、ツウーッと熱い蠟が背中中で燃えるんですね。

「言え」

「どうしても知らない」

というと、もう一つ拷問かけると言うんですが、「もう勘弁してくれ」。ちやうど例のお菓子屋が来たから、「何でもわたしのものをあげるから、ともかく勘弁してくれ」と言つたら、夕方になつて菓子屋がわたしを呼び出しました。実はシベリアへ連れて行かれるので、全部いいものを着けていこうと思つて、万年筆もいいものを持ちましたし、時計も一番いいやつでした。大連はフリーポートでヨーロッパのいいものが沢山ありますから、そういうものを全部着けて、一番いいものを着て、報道部長の斎藤少佐から貰つた一番いいピカピカの長靴を履いて行つていたので。中尉が、おまえの服と長靴や時計を欲しいと言つて、いるが、それをやるか、と言うから、「何でもやる、財布もみんなやる」。じゃ、待つてくれ、話して来る、

と言ってどこかへ行って、また戻ってきて、「OK、カモン」。

ざらめ砂糖の紅茶の一杯

こんどは板張りのヘンな椅子じゃなくて、ソファに座らしてくれるんですね。紅茶をもってきてまして、忘れもしません、ざらめの砂糖をもってきて何杯でも入れて飲め、と言います。気持ちが悪くなって、睡眠剤でも入っているんじゃないかと思いましたが、とにかくざらめの砂糖をいっぱい入れて飲んで、うまかったですねえ。拷問もあったあとですから、そりゃ本当に……。

すぐ脱いでくれというので、中尉がいなくなりました、アルメニアのおじさんが、なんと、満人のヤンチヨ曳きが着ているような、隅っこを見るとつぶしたシラミがずーっとついていて、汚い薄いものを二枚持ってきて、これに着替えろというんですね。全部脱いで、何もかも全部取られて、まア猿股だけはそのままはいておりましたけれども、それを着て、ガタガタ寒いんです。

「スカール、スカール(早く早く)」と言われて、裏門に馬車一台来ていまして、その馬車に乗って「ドスピダニア(さようなら)」と言って、サアーッと家へ帰ったんです。

コンコンと戸をたたいて、

「女房、オイッ、帰ってきた」

「アラッ、帰ってきたの、入らなさい、早く」

「オレは友だちの家へ逃げるからな、着るものを持つてこい」

ともかく、それはよく知っているんです。東憲兵隊が一回逃がすと、西憲兵隊がすぐ捕まえるんです。西憲兵隊が逃がすと、南憲兵隊が捕まえる。そういうようにちゃんと順序立ててやっているものだから、すぐ逃げなきゃダメなんです。逃げまして、やっとシベリア行きからは解放されたようなものですが。

あのころニッケという、日本毛織がやっていた素晴らしい喫茶店がありまして、もう六か月も経ったから大丈夫だろうと思って、久しぶりに座ってお茶を飲んでおりましたら、スッと、その中尉が私服で入ってきて、映画に出てくるいわゆる向こうの憲兵の怖い顔です。スゴスゴとわたしは出て、また逃げましたですね。やっと逃げましたが、ほかの連中はみなと捕まりました。

ただ、びっくりしましたのは、わたしが一番最初に調べられた時に、

「おまえは放送局でいろんなものをこしらえてるそうだな、そのためにシベリアへ行ってもらったことになったから」

と言う。

「しかし、それはわたしには責任はない。わたしの上には課長がおり、その上には部長がいて、その上に局長がいるので、そういう順序で局長からやつてもらいたい」(笑)

「ニエット。おまえにはオリジナリティーがある。

おい、出せ」

と言ってダアアと出てきたのが、わたしの書いた放送の台本です。全部揃っています。本当にその時に、恐ろしい国だなあ、と思ってゾォーッとしましたね。まア、好きな方もいらっしやるかもしれません。



▼高桑幸吉会員の近著「マッカーサーの新聞検閲」中に三十七年前、私の書いたボツ原があるのを見つけた。片山内閣の組閣風景を書いた記事で、片山首相が「ビタミ注射に訪れるブラウン夫人に助けられて」という個所が削除されたのです。米人医師の出入りにさえ神経を使ったGHQの検閲ぶりは、昨今の日米蜜月ムードからみれば奇異の感さえ抱かせます。(個人D 山崎英祐)

▼今年は執筆に明け暮れる年になってしまった。十一月月上旬、東洋経済新報社から、世界の銀行の支配力、を浮きぼりにした仏経済記者の本の編訳。年内ぎりぎりに、ECのルーツを、その創設者ジャン・モネのメモリアルを土台に編さんしたものを共同通信社から出版の予定。その折はよろしく。(個人D 黒木寿時)

けども、好きな方にも言っておきたいけど、恐ろしい国ですよ。わたしがとくに捨てたものが全部ある。ソビエトに対して関東軍からの命令でやっている、それもちょっと意を込めたような放送の台本が全部そこにある。お前のオリジナリティーがある、だからどうしても連れて行くと、こう言うんですね。

結局、上着やら、ズボンやら、靴やらで、なんとかそこを逃れまして、逃げきったわけですが、私は逃げ損ったのが局長とか報道部長で、こういう人たちはみんなシベリアへ行きまして、本当に悲惨な目に遭いました。(文責・編集部)

スタジオ訪問
ONE WAY

ワールド ホットライン

文化放送

「ワールド・ホットライン」

「おはようございます 田中直毅です」

九月二十五日午前六時十五分。「スタジオ訪問」としては初のラジオ局。文化放送二階の第一スタジオからさわやかな高橋小枝子アナウンサーの声に続いて、田中キャスターの歯切れの良いあいさつがガラス越しの副調室にひびく。

「まず、世界のトップニュースからいきましょか」

軽快なBGMにのって高橋さんがホットな国際ニュースを読みあげていく。この日のニュースは五本。終わったところで田中さんの的確なコメントを付け加える。

すぐに「ニューヨーク・マネー情報」へ。ひけたばかりのニューヨーク市場から株式、円相場、金価格などが国際電話もまじえて伝えられる。

同番組は民放ラジオでは珍しいタイプの「国際情報番組」として三年前にスタ

ート。キャスター、放送時間、担当アナウンサーなど多少の変更を経て、現在は三人のキャスター（田中直毅国民経済研究協会主任研究員、月・火、小林薫産業能率短大教授、水・木、牧野昇三菱総合研究所取締役会長、金）と高橋アナ、それにディレクターで制作に当たっている。出勤前のビジネスマンの間に固定ファンを持つという。

「三人とも個性も専門も違いますが、それぞれ一流の語り手です」と火曜日担当の佐藤隆ディレクター。さかゆい所に

国際電話と

ゲストが目玉

手が届く人をが選んだ理由だそうだ。

CMをはさんで「ワールド・ホットライン」のコーナー。毎日二本、世界各国へ国際電話をかけ、実際に現地生活している人からタイムリーな話題について話を聞く。

「今日はテヘランへむすびます。毎日新聞島越特派員にお話をうかがいます。現在テヘランは午前〇時五十九分です」

高橋さんの紹介をうけてコーナーは始まる。意外に明るいような声が電話を通してスピーカーから流れてくる。

電話の相手は海外駐在のジャーナリスト、ビジネスマン、留学生など。三年半の間に約五〇〇人の電話ネットワークが世界中に作られた。「知人のツテなどをたどって作った、いわば友達輪のようなものですね」と佐藤さん。ディレクターは番組前日から局に泊まり込み。翌日の電話の相手を選び、あらかじめ約束をとっておく。本番ではコーナーの始まる数分前に、副調室から相手呼び出ししておく。「ノンビリした国からの電話は話のペースもノンビリしますネ」と高橋さん。

国際電話という性格上、アクションも起きやすい。本番直前に電話を入ると相手がいない。ようやく探して

当ててみるとご当人はのんびりレストランで食事中。また、前夜の約束をすっかり忘れて学校へ行ってしまった。たまたま同じホテルに滞在中の同姓同名氏が出演したり。今でこそ佐藤さんも高橋さんも思い出し笑いだが……。

続いてゲストを迎えるの「ポスト・コンフィデンシャル」。この日のゲストは電電公社企業通信システムサービス部長の式場英さん。テーマは三鷹で始まったINS。十分余り、田中さんとの間に専門的な話題もまじえて、つつこんだ会

話がかかわれる。

「まず誰もが少しずつでも興味を持っているテーマを選び、一番適した人から話を聞くようにしています。モチはモチ屋に、ということですね」と佐藤さん。したがって、迎えるゲストもジャーナリスト、学者、ビジネスマンなど多彩な顔ぶれ。つい熱が入り、時間をオーバーすることもある。あらかじめ録音・編集すれば短時間で中身の濃い話にはなるが、生の会話の持つインパクトを大切にしたいという。また、ラジオの特性を生かし、構えさせず、人を引きつけられる番組にしたいとも語る。

午前七時。最新の交通情報で番組は終わる。（河野 聡）



ホットな話題に身をのりだす田中直毅さん（左）

先月のクラブゲスト

飯田 亮 セコム会長



「ニュービジネスは潜在の潜在の潜在」表面には出ていない。社会が何を必要としているかは、その社会の人は本来分かっている。それを想像し、企業がクリエーティブな活動に結びつけ、リスクを負って、社会へ提示する。それがニュービジネスの芽になるというわけだ。

水と安全はタダと思われがちで、安全を有料で売り出し、二年前資本金百五十万円で始めた会社は、いま年商六百五十億円。その体験からニュービジネスは「既存社会への異物混入なので、事業化に際しては制度、法制等の壁も厚く、いかに社会的認知を得るかも重要」とする。

今後の可能性は、コンピュータのソフト価格の低下と新通信技術の中にあるが、これが「物流システムと結びついて初めてシステムとして機能する」。ただリスクの大きいのが問題のようだ。【二七日(月) シリーズ研究会「ニュービジネス」(一) 司会 平田真巳企画委員 出席 七九人】

ルイ・メルマズ フランス国民議会議長



欧州議会選挙で極右が伸び左翼が後退したが、これが二年後のフランスの総選挙にどう関係するのか。

「いまはまだ欧州議会の重要性が低いので、この選挙は米国の中間選挙的性格を持ち、世論の不満を表わすところもある」。「産業近代化政策で失業者が出ている労働者階級の棄権率が高かったのも一因。ただ国民戦線の進出は社会のある傾向を表わしてもいるので、慎重に対応しなければならぬ」

総選挙では、ミッテランの社会政策と産業近代化政策が評価されるとし、代案を持たない野党の分裂を指摘した。【二八日(火) 記者会見 司会 友田錫企画委員 通訳 齊木康夫 出席 三七人】

エル・アジ・オマール・ボンゴ ガボン大統領

ゆっくりとしたフランス語で、めい想



の中から言葉をとり出してくるといった感じもある。ただ、話はきわめて現実的で合理的である。質問はチャドの内戦問題、日本との経済協力、アフリカの飢饉問題の三つ。いずれの問いにも、アフリカのリーダーの一人といわれるだけに、聞く者の胸にジーンと迫る答弁内容。投資促進を期待する日本への熱い思いと、「アフリカの政治家は政治のための政治をやらずに」との発言が印象的だった。

【二〇日(木) 記者会見 司会 新井明理理事長 通訳 三浦信孝 出席 五八人】

石橋 政嗣 日本社会党委員長



朝鮮労働党の招待で、九月十七日出発、北京からピョンヤン入りし、金日成主席と会談、二十三日帰国。

翌日、翌々日と連休で二十五日は朝刊休刊日。出発前に会見の日取りが、タイムズよくセットされたこともあり、一二人が出席した。

ここでは委員長が当日明解に答えなかった問題を紹介する。①日本人妻の問題 ②ラングーン事件③権力の世襲。

①と②については「話し合ったとも合わなかったとも答えられない」。ただ②についてはこの後も二人が質問したので、「テロへの反対は従来から党として

主張している。特定の事件に関連して、朝鮮から帰って、私がコメントすることは、今後の任務の遂行もあるのでひかえたい。当事者が話し合いを行う段階になれば、話し合われる問題で、私が何かいうことはなんのプラスにもならない」。③には「日本の国会も二世が多いので」。【二五日(火) 記者会見 司会 藤川龍也企画委員 出席 一八八人】

ピーター・ミラー ロイズ会長



この四年間、イ・イ戦争のため、ロイズがベルンシャ湾で支払った金額は「五億ドル」。しかし、さすが世界

のクリスチャン引き受け人、「撤収はありえない」。【二八日(金) 記者会見 司会 高野洋企画委員 通訳 池田薫 出席 四三人】

石原 一子 対米輸入促進女性ミッション団長

三十三人の女だ



けの買い出し部隊を率いる団長さん。非関税障壁や百貨店の体質まで、質問は活発をきわめ、どれにも真正面から「商人道」で答えた。【二八日(金) 記者会見 司会 有馬真喜子企画委員 出席 二七人】

プロフィール

（十月一日付入会の個人D、法人・個人
賛助、特別賛助会員の方がたです。）

紹介会

4日▽民放連経営委員会(民放連 長竹成吾会員)▽メディア開発委員会(協会 今田昭会員)▽新聞航空懇談会(朝日 伊波新之助会員)

5日▽NRN運営協議会(ニッポン放送 佐久間寛夫会員)▽テレビ東京開局二十年記念「イタリヤ映画祭」記者発表(テレビ東京 入江碩郎会員) 6日

▽民報協記者研修会——講師・稲葉三千男東大新聞研究所教授、伊藤昌哉政治評論家、式場英電電公社企業通信システムサービス本部長ほか(NTV 三箇和彦会員)▽スポーツ六社会(協会 薄井猛会員) 10日▽第十一回日米記者交換計画歓迎レセプション(協会 阪田秀会員)▽社会部長会(NHK 玉井賢二会員) 12日▽放送番組向上委員会(矢野輝雄会員)▽新聞広告報編集委員会(協会 権田萬治会員)▽銅牛康彦氏(朝日新聞前ベリ支局長)を偲ぶ会(朝日 浅井泰範会員) 13日▽「地球発22時」製作発表・懇親会(毎日放 木村孝会員) 14日▽東京マスコミ倫懇月例会(中村泰次会員)▽JNN報道部長会(TBS 太田浩会員)▽東京シンドニー会—元シンドニー

特派員の集まり(朝日 小林宏会員) 17日▽全国新聞編集者会議(時事 中野正和会員)▽国際衛星共同利用機構理事会(NTV 藤川魏也会員) 18日▽十七社会(南日本新 入田良男会員)▽レオン・ディオン ラバル大学教授講演会(カナダ大使館 吉田健正会員) 20日▽新聞協議会——講師・田丸秀治電通社長(東奥日報 柿木原政則会員)▽在京電波本部長会議(朝日 滝井禧夫会員)▽関東U四局広報者会議(TVK 田代昌史会員)▽民間放送地方局懇談会(民放連 泉長人会員) 21日▽定年退職者懇親会(日経 寺内正彦会員)▽ウィルス雇用・労使関係大臣記者会見(豪州大使館 武田吉朗会員) 22日▽東京写真記者協会加盟社デスク会(共同 石渡和夫会員) 26日▽英字紙編集者会議(朝日イブ 海老坪勇会員)▽三雲四郎さんを励ます会(サンケイ 山中末孝会員) 27日▽食品産業基本調査会(日経 青木克之会員) 28日▽東京会議「二十一世紀のビジョンを求めて」国際会議(読売 原孝文会員)▽放送通信制度研究会(NHK 片岡俊夫会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った会合の主なものです。九月の総回数は一一五回でした。)

第54回会報委員会

昭和59年9月12日(水)
日本記者クラブ小会議室

十月号の編集について協議した後、井出委員が、クラブ創立十五周年事業として進めている「とっておきの話」「ゲストサイン集」刊行の進行状況を報告、意見を交換した。

出席 深谷委員長。桂、井出、斎藤の各委員。

第85回会報資格委員会

昭和59年9月13日(木)
日本記者クラブ小会議室

十月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

法人賛助会員の入会資格に関連して、「マスコミ関連産業」の定義について意見を交換した。その結果、文章で特定することは避け、定款の定める当クラブの目的に沿って、委員会がケース・バイ・ケースで考え、委員会として結論が出しにくい場合は、理事会に判断をおおぐことにした。

出席 渡辺委員長。加藤、玉井、上野、植島の各委員。

第115回企画委員会

昭和59年9月6日(木)
日本記者クラブ大会議室

事務局から、一木豊氏から吉村久夫氏

への日経の委員交代を報告した。

全斗煥大統領の会見について、理事長の意を受け外務省、韓国大使館と折衝に当たった、藤村委員長から概要次のような報告がなされた。

理事長が司会をし、日本記者クラブの主催で実現できるよう交渉したが、先方は迎賓館での日本人記者だけの会見を希望した。会場の問題は譲歩可能と考えたが、外国人ジャーナリストにもまったく平等に門戸を開放している当クラブとしては後の条件はのめず、話し合いがつかなかったため、当クラブとしての会見が結果として実現しなかった。

次に去る八月二十一日行われた、高野、有賀、伊藤の三委員によるブレインストーミングの結果についての報告がなされた。

三人委員会の報告の要点は以下二点。
①クラブ行事を報道する際には、正しく「東京・内幸町の日本記者クラブ」と表記するよう各社の協力を求めたい②ウィングプレスに魅力のある、たとえば現行の年頭の総理会見に類するような行事の開発が必要。

新シリーズ研究会「ニュービジネス」についての平田委員の報告を了承した。
出席 藤村委員長。本島、阿部、吉村、広瀬、平田、有賀、高野、水野、武藤、鈴木、浅野、有馬、中沢の各委員。



写真部

来春の大学卒業予定者に対する企業からの求人票が、九月十日朝から各大学で一斉に公開された。早稲田大学では授業開始が十七日からだが、午前九時すぎから学生たちが続々とつめかけた。

写真 田中紀男
(東京新聞写真部)

カメラマンの冒険

広島・中日戦取材する写真部員の意識は、グラウンド上の決定的瞬間に鋭く焦点が絞られる。

だが同じ試合を社会面のために取材する写真部員の目は、七分三分で観客席に向けられる。社会現象として捉えようとするからだ。

来春の大学卒業予定者に対する企業からの求人票が、九月十日朝から各大学で一斉に公開されたとき、経済部記者の目は、すでに各企業の求人動向に焦点が結ばれており、もはや「十日公開」に対して関心は薄い。

だが、この日の社会面のために取材する写真部員にとって、これはひとつの社会現象である。学生たちの真剣な表情が、ひとつの真実を伝えるからだ。まして女子学生たちの表情だったら、文句はない。思い切って掲示板の上から、彼女たちの表情を捉えた。

この写真は「求人票をメモする女子学生たち」を、読者大衆に伝えるには、説明不十分だとして没になった。七分三分の兼ね合いを越え、九分一分の冒険になったせいかもしれない。(文・中沢道明会員)

● 囲碁の会 ●

九月二十九日の例会は、参加十七人、総対局数四十局。次の方が優秀な成績をあげた。

伊藤光彦五段(毎日)、村上孝止六段(協会)、石崎信治五段(会友)、白井敏之二段(共同)、小林淳宏四級(時事)。

なお、小野盛四郎二級(D)は一級に昇級した。

十月の例会は二十日(土)午後一時から、クラブ大会議室で。年の暮れ十二月二十二日は第三回大軒杯争奪大会です。ご予約おきください。

初めての方でも大歓迎。六段から四級までの会員がいます。お気軽に参加してください。

レストランのテーブル予約について

レストランで、お客をする際はできるだけ電話(五〇三) 三七六六でテーブル予約をするようお願いいたします。最大十名までの予約が可能です。

コピーはセルフサービスで

受付前のゼロックスはセルフサービスです。料金は一律一枚三十円、縮小・拡大も可能です。初めての方はクラブのフロアマネジャーが使用方法をお教えいたしますので、受付でおっしゃってください。

録音テープをご利用ください

クラブ主催の昼食会、記者会見、研究会の講演、質疑応答を録音したカセットテープが事務局に保管されております。お越しになる前に、事務局へお電話いただければ、ラウンジ内のライティングブースでおききいただけるよう準備いたします。

会員の著書(ご惠贈いただきました)

ナショナル・トラスト

木原 啓吉

クラブ訪問者

警察庁次長

9月28日/鈴木貞敏警察庁長官
10月1日/山田英雄

ゲスト・カード

(ヒンズー紙 インド)

第二回南西アジア記者研修参加者—アバン・メノン

イロン・オブザーバー紙

スベンドリニ・スグロ(セ

ハリ・アディカーリ(ゴークハバトラ紙 ネパール)
ウスマン・ハミッド・カーン(A P P通信 バキスタ

ン) シャファイクル・ラーマン(イテファック紙
バングラデシュ) / 第二回アフリカ地域記者研修参加

者—ジェフリー・M・ヌクルル(前デリーニューズ紙
タンザニア) ウェリントン・カルウイシヤ(デ

リーメール紙 ザンビア) / 第六回欧州記者研修計画参加者—エリック・ワルター(ユジス・ヌーベ

ル誌 フランス) クラリス・ブルヌベリー(シードスベ

ンスカ・ダーグブラーデット紙 スウェーデン) リ

チャード・トムキンス(ファイナンシャルタイムズ紙
イギリス) / 第二回中南米記者研修—ホルヘ・エド

ウアルド・オリアス(サンタクルス大学テレビ局
ポリビア) イザ・テレジーニャ・ベソア(オ・グロ

ボ紙 ブラジル) マリア・ヒメナ・ドゥサン(エル・

・エスベクテダー紙 コロンビア) ルイス・カルテ

イン・サンチエス(ラ・リパブリカ紙 コスタリカ)
ビラール・フェレイラ・ガルシア(エル・ソル・デ・

アイ)

▲ 展覧会の招待券 ▼

朝日新聞社から「鹿児島寿蔵のすべて」と「朝日陶芸展'84」をご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

落丁、乱丁はお取りかえします

新しい会員名簿を作成しました。お届けした名簿に落丁等がありましたら、お取りかえいたします。事務局までお知らせください。

計報 大山恵佐会員(日本海事新聞)が十月二日、肝不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

十月の行事

18日(木) 午後2時~3時30分 クライススキー前

オーストリア首相記者会見 クラブ記

者会見室

19日(金) 午前10時30分~11時30分 ムザリチ

ユニジア首相記者会見 クラブ記者会

見室

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二一